2025.02.04 修士論文最終発表

川添登を「編集者」として再定義する

～ 1970 年代以降の “代謝理論” と民間学的実践過程を通して～

中谷礼仁研究室
解築学ゼミ修士２年
5222A006　安東　舜一

目次

【序章】
0-1. 研究背景
0-2. 研究目的
0-3. 既往研究の整理と研究方法
0-4. 用語の定義
【本論】
第 1 章：幼少期～青年期～新建築時代
1-1. 想像力豊かな幼年期
1-2. 関心が拡散する青年期
1-3.『新建築』編集長として建築界に切り込む
1-4. メタボリズムの誕生
1-5. 既往研究における川添登像の概観
1-6. 小結：「実作」よりも “仕掛け人” を志向する川添登

第 2 章　万博を契機とした組織形成
2-1. 東西を繋ぐ一学際ネットワークの代謝
2-2.〈貝食う会〉が代謝した組織
2-2-1. 2 つの株式会社の設立
2-2-2. 3 つの学会の設立
2-3. 小結

第 3 章　代謝を続ける株式会社と学会活動
3-1. 株式会社 CDI での実践
3-2. 生活学会の代謝を促す
3-3. メタボリズム・グループの再集結
3-3-1. つくば科学博
3-3-2. 都市美創出のためのデザインコントロール手法
3-3-3. 川崎市市民ミュージアム
3-4. 小結：万博以降の川添登

第 4 章　川添登を “民間学” の系譜に位置づける
4-0. 民間学とは何か
4-1.『市政』（全国市長会）
4-2.「開発」との距離感
4-2-1. 文化行政での梅棹忠夫との比較
4-2-2. 黒川紀章の「社会工学研究所」との比較
4-3. トヨタ財団とフィランソロピー研究会
4-4. 伊勢論への終着と執着
4-5. その他の活動
4-6. 小結

第 5 章 「編集者」としての再評価
5-1. Re:” 川添登とは何ぞや”

0. 序章

0-0. 論文概要

川添登（1926 ～ 2015）の肩書は「建築評論家」が一般的である。あるいは「文明評論家」や「建築ジャーナリスト」といったところだろう。主な仕事としては「新建築編集長」と「メタボリズム・グループの中心メンバー」が知られている。また、「生活学を体系化した」という功績で南方熊楠賞を受賞しているため、そういった文脈で捉えている人も多いかもしれない。しかし、1970 年大阪万博を起点とした日本未来学会の発足以降の複数の株式会社や学会の設立についてはあまり知られていないのが現状であり、また、研究レベルにおいてもそれぞれの領域で理解されるに留まり、川添登という人物の全体像を捉えられることは極めて少ないと言ってよい。本論文では川添登の生涯全体を研究対象とし、その数々の功績を網羅的に掘り下げるだけでなく、それぞれの分野・領域における活動がどのようにリンクしていたのかを明らかにするものである。

また、それによって見えてくる川添登の活動において貫かれている「民間学」としての姿勢についても明らかにする。

0-1. 研究背景

図 1. 川添登

川添登は「新建築編集長」、「メタボリズム・グループの中心メンバー」として知られてきた。しかし、シンクタンク株式会社ＣＤＩにける文化行政での功績や、日本生活学会にける生活学の体系化に関する多大な功績、晩年の伊勢論など、それぞれについて語られてきても、それらが結び付けられて総体としての川添登が論じられたことはほとんどない。本研究はその川添登の全体像を明らかにするものである。

【仮説】
川添登について語るとき、「新建築編集長、メタボリズム・グループを率いた建築評論家」としての側面のみを強調してきたことが、川添登の多分野に渡る活動の全体像を理解することの妨げとなってきた。

0-2. 研究の目的
・川添登の全体像を捉え直し、
異なる領域における活動がどのように連関していたのかを解明する

・それによって川添にまつわる既存の言説の再検討を促し、活動の意義や効果を再考する

0-3. 既往研究と研究方法

論文略称	A：児童文化	B：評論・批評	C：生活学	D：行政・企業	合
城戸論文（2023）	○	◎	◎	×	
川股論文（2019）	◎	○	◎	×	
中谷・難田OH2（2009.4）	○	◎	×	◎	
小林（2015）	×	◎	◎	×	
黒岩（2013）	×	×	◎	◎	
八束（2011）	×	◎	×	◎	
コールハース（2011）	×	◎	×	◎	
中谷・難田OH1（2009.3）	◎	◎	×	×	
池田論文（2001）	◎	◎	×	×	
八束・吉松（1997）	×	◎	×	◎	
長谷川（1995）	×	◎	◎	×	
石川（2013）	×	○	○	×	
内藤（2008）	○	○	×	×	

既往研究の整理

・年表の分類
城戸論文（2023）において作成されている「川添登年表」は、川添の生涯における活動を包括的に捉え、分類したものである。
分類基準は以下の 4 つ。
黄：児童施設研究
赤：伝統論とメタボリズム
青：文化行政と企業（万博、CDI）
緑：今和次郎と生活学

本研究では川添をより包括的に論じられるように、以下の 4 つに再分類
A：児童文化　（児童施設、子ども会、童話…）
B：評論・思想（新建築、メタボリズム、伊勢…）
C：生活学　　（日本生活学会、道具学会…）
D：行政・企業（万博、株式会社 CDI、計画連合…）

・既往研究の整理から以下の 2 点が分かった
１．B（新建築時代やメタボリズム）についての言及が圧倒的に多い
２．川添登について包括的に論じた研究であってもＡ～Ｄの全てを関連付けられていない

0-4. 用語の定義
川添登『メタボリズム 1960』での序文

「メタボリズム」とは、来るべき社会の姿を、具体的に提案するグループの名称である。われわれは、人間社会を、原子から大星雲にいたる宇宙の生成発展する一過程と考えているが、とくにメタボリズム（新陳代謝）という生物学上の用語を用いるのは、デザインや技術を、人間の生命力の外延と考えるからに他ならない。したがってわれわれは、歴史の新陳代謝を、自然的に受入れるのではなく、積極的に促進させようとするものである。
今回は、建築家による都市の提案でまとめられたが、今後は、各分野のデザイナーや美術家、技術者、科学者、また政治家など、多分野からの参加が予定され、すでにその一部は準備を始めている。われわれのグループそのものも、たえまない新陳代謝を続けていくであろう。

→「人間社会」を考える提案を行なう主体、客体は「建築家」、「都市」でなくても構わないとも読める。

→ここで、「代謝」をそのまま「生命主体が環境へはたらきかけ、みずからを成長させていく主体的な行為」（川添『思い出の記』p.116）と定義し、これを「メタボリズム」ではなく「代謝理論」と呼ぶことにする。

図 2.〈貝食う会〉、左から、加藤秀俊、梅棹忠夫、林雄二郎、川添登、小松左京、撮影：梅棹淳子

第 1 章：（略）

第 2 章：万博を契機とした組織形成

2-1. 東西を繋ぐ一学際ネットワークの代謝
・1970 年大阪万博に向け、万博協会とは無関係に動いていた勉強会「万国博を考える会」に川添は飛び込んでいく。
・そこで、
　加藤秀俊（社会学者）
　小松左京（ＳＦ作家）
　梅棹忠夫（文化人類学者）
　林雄二郎（経済企画庁出身官僚）
と〈未来学研究会〉を結成。学問的な議論だけではなく食事を楽しみながら交流を深めたことから〈貝食う会〉という名前が付けられた。
2-2.〈貝食う会〉が代謝した組織
2.2.1　2 つの株式会社の設立
・トータルメディア開発研究所（1970.9）→最高顧問
・株式会社ＣＤＩ（1970.10）→代表取締役
2.2.2　3 つの学会の設立
・日本未来学会（1968）→常任理事（会長：中山伊知郎）
・日本生活学会（1972）→理事長（会長：今和次郎）
・日本展示学会（1982）→編集委員長（会長：梅棹忠夫）
2-3. 小結
日本未来学会がなければ CDI も生活学会もなかったため、川添登にとって人脈上はメタボリズム・グループに匹敵する重要度だが、〈貝食う会〉の 5 人はそれぞれ別活動へ派生（あるいは回帰）し、人脈は保ちつつも、「未来学」は各分野へ発展的に解消されていったといえる（吉澤 2012）

第 3 章：代謝を続ける株式会社と学会活動

3-1. 株式会社 CDI での実践

・京都の文化系シンクタンク（Communication Design Institute）

地域密着型の金融機関「コミュニティ・バンク」の理想を掲げる榊田喜四夫（京都信用金庫）が、創立 45 周年記念のイメージチェンジ戦略について加藤秀俊に相談し、加藤は「即座に川添さんの名前をあげ」、川添に話が回った。

川添は「アートディレクター」として菊竹、栄久庵、小松、粟津らメタボリズム＆未来学人脈に声をかけ、京都信用金庫のデザイン計画を一新した。

この仕事をきっかけにＣＤＩが設立。そこには万博でできた関西知識人たちとの繋がりを維持（代謝）する意図もあった。

・コミュニティバンクというメタボリズムの実践

→川添ディレクター、菊竹清訓設計で京都信用金庫の支店を最終的に 50 以上設計。関連書籍も編集・出版する。

※栄久庵憲司の GK インダストリアル・デザイン、粟津潔デザイン研究室、小川信子（子どもの遊び場）といった旧知のメンバーも計画に関わっている。

・日本生活学会の設立

1951 年：令和次郎研究室助手時代の生活研究会からスタート

1971 年：『令和次郎集 1 考現学』刊行→「考今会」発足→

1972 年：日本生活学会設立

・生活学会は梅棹忠夫がいなければできなかった？

高度経済成長期ごろの令和次郎は「考現学の方法は捨てた、いまでは週刊誌がそれをやっている」と言っており、川添が梅棹にこれを伝えたところ、梅棹は憤慨し「週刊誌の低俗さに対し考現学は崇高な精神に満ちており、文化人類学の調査に使える」と断言。

梅棹は考現学復興の旗を掲げ、九州芸術工科大学で考現学の講義をおこなった。それを聞いた今は喜び、「考現学は梅棹忠夫に譲る」とまで言った。しかし、梅棹はなぜ考現学が中断したかを問題にすべきと指摘した。そこで川添は梅棹と話し合い、「生活学は考現学を方法論のひとつとする学問である」として、今を会長に日本生活学会を設立した。

3-2. 生活学会の代謝を促す

小川信子、黒川いずみの生活学会で川添とつながりの深い人物は、川添を「編集者」「プロデューサー」と評し、学会運営と成果物の密度を讃えている。

・メタボリズムから生活学へ

「今は逆にシステムキッチンなんか、「システム」だと言っていても、実際にはそのメーカーのものでなきゃ取り替えもきかないし、がんじがらめで不自由極まりない。そういうのじゃなしに、ちゃんとしたルールをつくりシステマティックにやり、デザインに自由を実現しようというのがメタボリズムのスタートだったが、その後、*実際の日本の社会の工業化は全く似て非なるものの方向へ行ってしまったのはご存じのとおりです。その後僕が〈生活学〉に力を入れるようになった理由も、実はそうした背景があったからです。（****建築雑誌*** *1995）*

→カプセル建築への批判とも読める。

3-3. メタボリズム・グループの再集結

3-3-1. つくば科学博（1985）

1981 年 10 月：つくば科学博の会場計画その他を担当するため博覧会協会常任理事下河辺淳の要請で、メタボリズム・グループ、（株）計画連合設立。

代表取締役＝大高正人、菊竹清訓

取締役＝栄久庵憲司、黒川紀章、川添登

菊竹清訓はマスタープランの作成と会場設計の総指揮を担当。

※槇文彦は計画連合には加わらず会場の別パヴィリオンを担当。

3-3-2. 都市美創出のためのデザインコントロール手法

「国民的合意に基づく日本社会に適合したコントロールのあり方こそが，都市美を獲得していく唯一の道である．（中略）日本の都市空間の特質を把握するとともに， これまで欠けていた*アーバンデザイン概念を確立し，その上で建築コントロール手法のあり方を検討する必要がある****．（中略）以上の考え方に基づき， 本研究では日本の都市空間の特質を分析し， 都市整備・都市美創出に寄与するアーバンデザインとコントロール手法について提言する」*

【要約】

日本の都市が「文明性の原理」と「自然性の原理」の相克によって発展してきたとし、古代から江戸期にわたり、理性的な都市計画と自然や生活空間への回帰が繰り返されてきたと指摘する。自然地形の取り込みや「盗み見」「オク」「間」などの特質は、日本の都市空間を特徴づけてきた。現代においては、多様化や高齢化の進行から共生・多選択性が大きな課題となり、機能主義的近代計画から脱却すべきだと主張。そこで歴史や風土を踏まえた「アーバンデザイン・マスタープラン」を軸に、建築コントロールや公共空間の整備などを組み合わせて、地域らしさを活かした都市美を創出することを提案している。

3-3-3. 川崎市市民ミュージアム

・株式会社ＣＤＩで川添研究主査のもと、1981 年 8 月～ 1982 年 3 月、1982 年 3 月～ 1983 年 3 月、1983 年 12 月～ 1984 年 3 月の 3 回にわたって研究調査が行なわれている。

・菊竹清訓と計画連合による設計で、開館当初のテーマは「都市と人間」

・展示計画は川添登が最高顧問の「トータルメディア開発研究所」

・2019 年 10 月　台風 19 号で地下収蔵庫浸水（被害額 72 億円）

3-4. 小結：万博以降の川添登

株式会社ＣＤＩでの研究調査とメタボリストたちが計画連合を介して繋がり、実施までに至った事例もある。川添はこれまでの人脈を代謝させ、自治体規模から国家規模のプロジェクトにも取り組んだ。また、生活学会やトータルメディア開発研究所の人脈も稼働している。

第 4 章　川添登を“民間学”の系譜に位置づける

4-0. 民間学とは何か

「ふつうの市民が学問への自発性を喚起され持続し、それによって既存の学問を点検する気運をたかめ、さらに学問の新しい枠組への途をひらいてゆくかを考え、その意識を過去に投影させるとき、わたくしには「民間学」という範疇が浮んでくる。」

→民間学とは「市民の日常生活や実践から生まれる学問的営み」

4-1.『市政』（全国市長会）

全国市長会が発行する機関誌『市政』は、1952 年 8 月創刊の月刊誌で、地方自治体関係者向けに都市行政の最新情報を提供しており、主な内容は先進自治体のまちづくり事例や自治体経営の最新動向。2025 年現在も刊行されている。

川添は 1977 年 1 月から 1995 年 3 月にかけて約 18 年に渡って『市政』に連載をしていた。

→川添は地方自治体関係者に向けて最も長期に渡って発信を続けた。

4-2.「開発」との距離感

4-2-1. 文化行政での梅棹忠夫との比較

梅棹忠夫は国家規模の文化「開発」を行なった点が川添と異なる。梅棹の文化開発が政治的事情でついえたのは「開発」との近さだったのではないか。

4-3. トヨタ財団とフィランソロピー研究会

・トヨタ財団研究助成審査員（1978 年 7 月 1 日～ 1982 年 6 月 30 日）

「トヨタ財団は、1974 年にトヨタ自動車によって設立された助成財団です。創設以来、生活の質の向上、自然環境の整備と保全、社会福祉の充実、教育・文化活動の振興などにつながる意欲的・創造的な研究や事業に対して、多彩な枠組みによる助成を実施してきました」　（公益財団法人トヨタ財団 HP）

・「フィランソロピー研究会」を林雄二郎らと設立、川添研究室の名でトヨタ財団の助成をうけ、委員長になる（1982 ～ 1992 年）

→川添登・山岡義典編著『日本の企業家と社会文化事業ー大正期のフィランソロピー』（東洋経済新報社、1987 年 6 月）

4-4. 伊勢論への終着と執着

「「新建築」を辞めた後、新書版で「建築の滅亡」など三冊の本を出した。「民と神の住まい」は、竹内好が「一木一草に天皇制がある」と言ったのを受けて、僕もあの本を天皇制批判のつもりで書いたんです」（※ 1）

「戦前戦後をつらぬいて現在におよぶ、国民の現実の上にたった学問を総称して『民間学』とよばれているが、私の立場は、この民間学である」（※ 2）

川添が生涯最後の著書「古代史学への挑戦状」と位置づけ、初心でもある伊勢について、既存の学者（官学＝天皇制的布置）を痛烈に批判したのは、民間学という“在野”にいたからではないだろうか。

第 5 章：【結論】

【結論】

川添登とは、幼少期から晩年期まで関心領域を膨張させ続け、一度得た関係性を代謝させ続けることで自らも代謝し、民間学という精神的在野の視座から、幅広い領域における知的生産と実践活動に向き合い続けた「編集者」である。

参考文献

1. 川添登（1996）「思い出の記」、ドメス出版
2. 川添登 , 中谷礼仁・鷲田めるろ（2009）「川添登オーラル・ヒストリー」日本オーラル・ヒストリー・アーカイヴ
3. 川添登（1996）「川添登著作目録 1941.5~1996.12」
4. 川添登（1960）『建築の滅亡』現代思想社
5. 川股、田所（2017）『編集者川添登の建築ジャーナリズムについての研究 ー川添登が目指した建築ジャーナリズムー』
6. 川股、田所（2018）『岩田知夫による評論の特質とその時代背景 ー川添登編集長時代における『新建築』誌の記事・評論の分析を通じてー』
7. 川股、田所（2019）『川添登の執筆活動にみる領域横断的視座の再評価 ー思想形成期における交流関係と生活学との関わりについてー』
8. 吉田和弘（2014）『戦後建築ジャーナリズム再考ー建築産業系広報誌の研究を通してー』、中谷研究室修士論文
9. 加藤秀俊（1982）『わが師　わが友』
10. 小松左京（2018）『やぶれかぶれ青春記・大阪万博奮闘記』新潮文庫
11. 梅棹忠夫（2011）『梅棹忠夫の「人類の未来」暗黒のかなたの光明』、勉誠出版
12. 京都信用金庫（1978）『ゆたかなコミュニティを求めて』
13. 布野修司（1981）『戦後建築論ノート』相模書房

図 1：https://www.biz-lixil.com/column/pic-archive/inaxreport/IR175/IR175_15_37_120.pdf

図 2：https://www.projectdesign.jp/201405/designforpd/001356.php